

平成23年度事後評価結果(平成24年3月)

[研究開発課題名] PaaS-CAE基盤技術に関する研究開発

[委託機関名] 株式会社キャトルアイ・サイエンス

項目	評価	総合所見
総合所見	A	<p>(技術関係)</p> <p>(1)本研究開発は、R&D業務をシステム化するためのRCM(R&D Chain Management)を拡張し、クラウドを活用したソフトウェアのPaaS化を可能にする基盤技術を開発した。 研究目標の達成度はほぼ100%であり、優れた研究開発であると評価できる。また、開発された基盤技術は種々のR&D業務とアプリケーションに対応でき、国内外の研究機関などに導入が期待される。現時点ではR&D以外のビジネス用途には対応しておらず、ビジネス用途には追加のカスタマイズが必要である。</p> <p>(2)提案・契約時に示された機能に関しては、そのパフォーマンスとともに、ほぼ、達成されていると判断する。 技術面として、突出したものはないが、実用に耐えるシステムの設計・実装が行われ、運用実績・経験を蓄積していることは、評価される。 特に、公的研究開発機関における研究開発活動で利用されるITシステムの改善・効率化に対する要求が急速に増加している最近の状況を鑑みると、ユーザインターフェースからハードウェアコンポーネントまで、かつ、ロギングシステムの提供など、これまで、これらの機能において、実現されていなかった、しかし、必要性に対する認識が急速に増加している機能を実現しており、この点、すなわち、実システムとして導入可能なレベルのものを実装・実現、実運用の証左を行った点は、高く評価される。要素技術としての高い新規性とインパクトは必ずしも大きくないが、現存する売り先として考えている組織が必要とする機能を一通り持ったシステムの研究開発を行っている。また、本システムは、潜在顧客のサイトにおいて、1年以上の運用実績を達成しており、この点は、費用対効果の観点から、高く評価される。</p> <p>以上、研究開発成果は現状でR&D領域への対応に限られるものの、一通りのRCMシステムソフトウェアのPaaS化基盤を整備しており、技術的には妥当と考えられる。</p>
		<p>(事業化関係)</p> <p>事業化においては、受託者は総体的に”慎重な計画”に基づいた方策を事後評価で提示している。具体的には、売上の推移等を、安全側(最小値)で評価している傾向がみえる。このため、全ての評価項目について平均的な評価にはなり、大きな進展に結び付くような施策は見出しがたい。 本開発製品の潜在性を発揮して上記の評価を上回る事業化の成果をうるには、既存顧客にカスタム化したシステム提案、アライアンスパートナーの営業、販売ルートを活用した新規顧客への製品販売、等、先端的な技術や高度なノウハウを独占的に保持していることを活かして、更に積極的にビジネスチャンスをとらえるアプローチを早めに実施することを期待したい。</p>

(注)総合所見の公表にあたっては、企業秘密等に配慮しています。